

キリスト教の死と葬儀を考える

姫路あけぼの教会牧師 廣田守男

「しかし、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、私たちは待ち望んでいます。キリストは、万物をご自分に従わせることさえできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自分の栄光に輝くからだと同じ姿に変えてくださいます。」

(ピリピ人への手紙 3 章 20, 21 節)

クリスチャンの死、及び死の備えについて

1. クリスチャンにとって死は絶望ではない。

死こそ救いの完成、栄化の時であり、神様とお会いして永遠の世界に入る時です。救いはただイエス・キリストの十字架の血潮による罪の赦しにあるのであり、そのことを信じて神様の子の身分を授けられること以外に、父なる神様のみもとに至る道はありません。

十字架による罪のゆるしを信じるからこそ、死に対する完全な備えである。

(ルカ 23 章・42, 43 節、ヨハネ 3 章 16 節、11 章 25 節、14 章 1～6 節、ローマ 6 章 2 3 節、ピリピ 3 章 20, 21 節、コロサイ 3 章 1～4 節、1 テサロニケ 4 章 13～18 節、1 ペテロ 1 章 3～5 節)

2. 死は証しの機会、神の栄光の現れる時。

私たちが、死後に永遠のいのちの希望を見だし、そのことを人々に指し示しながら、自らの死を神様の栄光の現れる時として用いていただける幸いを覚え、この世の旅路を終わりまで主イエス様に従い通し、信仰によってその締めくくりとしての死を迎えることが出来るよう、祈り備えましょう。

(詩篇 116 篇 15 節、使徒 7 章 54～60 節、ピリピ 1 章 20～23 節、1 コリント 10 章 31 節)

3. いのちは神様の御手の中にある。

いのちは主の御手の中に握られているという信仰に立って、最終的には、一切を神様の御手にゆだねましょう。

4. 自分の死に関しては必ずキリスト教会葬でしてもらおうよう、はっきり家族・親族にお願いしておく。

召されてからでは遅いので、生前ははっきりと夫婦間で、或いは親族に明言し、お願

いしておく必要があります。自分一人が家族の中でクリスチャンの場合には、特にその点を生前にはっきり表明しておく必要があります。

キリスト教会葬について

1. 基本的に復活、再会の希望に貫かれている。

人間的な悲しみはあり、天から豊かな慰めと励ましは必要です。けれどもそれを上回る復活と再会の希望とが、信仰によって貫かれているのです。

2. 一切はキリスト教式で行われる。

① 焼香はない。

人の魂は死んだら礼拝の対象になるのではありません。死んだら即座に造り主なる神様の御許に立つのです。そして人生の精算の時を迎えます。

キリストの十字架を信じ受け入れ、罪のゆるしをしっかりと握りしめている者のみ、神様の子どもとして新しく生まれたその身分のゆえに、神様のみもとへと導かれていくのです。

ですから、死と同時に神様のみもとへと召された兄弟姉妹の魂を、拝んだり、供養したりすることは一切不要です。今すでに彼の魂は召されて父なる神様のみもとに主と共にあるのです。キリスト教会葬では、この希望を掲げ、歌い、死の悲しみを越える希望にこそ目を向けます。

② 位牌もない。

死んだ人の生涯を思い、忘れずにいることは大切です。けれどもその魂を、礼拝の対象として拝む必要はありません。

③ 個人の写真や遺体も礼拝の対象とはならない。

土から造られた肉体は、死と同時に土に帰ります。そこにはもはや魂はありません。本人は神様のもとです。抜け殻のような遺体を拝んでも意味はありません。故人の写真についても同様です。

④ ただし遺体は大切にします。飾花は供養ではない。

遺体は抜け殻だからといってどうでもいいものではありません。丁寧に拭き、必要な処置をして、花で飾ります。「献花」はあくまで遺体を心を込めて生花で飾るのです。

⑤ 弔辞ではなく「故人の思い出の証し」。

今生きて葬儀に参列している人々の前で、心を込めて、遺族を慰める思いで証しするのです。

⑥ 造花は飾らない。一切が復活の希望を現す生花。

⑦ 戒名もない。

死後のことは神様のみが定めます。

- ⑧ 祈りは、遺族への慰めと個人の信仰をよく継承できるようにとの祈り。
死んだ人が天国に行くように、との供養の祈りではありません。遺族への慰めは、その痛みを覚え、心から祈ることです。
- ⑨ 気持ちをお金で包む場合は「御花料」または「寸志」「慰」「哀悼」と書く。死人にささげる「御霊前」ではありません。

(姫路あけぼの教会一日修養会発題、2 , 0 0 0 年)